新刊紹介

■石田 正美■

『メコン地域　国境経済をみる』

石田正美 編

アジ研選書No.22

カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム、タイ、中国の雲南省と広西チワン族自治区の五カ国二地域から構成されるメコン地域も、二〇〇九年が日メコン年に指定されるなど、日本国内でも随分と関心が高まっている。本書はこうしたメコン地域の経済回廊など主要幹線道路の国境におけるヒトとモノの移動の自由化と、国境ゲート周辺で形成される国境経済圏に焦点を充てたものである。

序章「越境移動の進展と国境経済圏」は、冷戦終結以降加速するヒトとモノの越境移動自由化の過程を示すとともに、各国境で形成される国境経済圏を、三タイプに分類している。第一は、トラック積替所や倉庫などが国境に立地される国境貿易である。第二は、国境を隔てて相対的に貧しい国が豊かな国の旅行者の越境を狙って立地するカジノ・国境観光である。そして第三が、国境地域で貧しい国の低賃金労働力と豊かな国の電力や港湾などインフラの双方の利点を活かし、国境地域に工業団地などを立地する国境産業である。このうち国境貿易と国境産業はヒトとモノの越境移動の自由化とともに活況を示してきたが、ヒトを含む越境移動が欧州共同体のように完全自由化されると、労働者がより高い賃金を求め都市に移動するため、長期的には衰退する可能性があるとしている。

第一章「タイにおける移民労働者管理とその課題」は、「半合法的労働者」が多いともいわれるカンボジア、ラオス、ミャンマーからタイに越境する労働者を合法化させるためのタイの制度について、その問題点と課題を述べている。第二章「越境交通協定（CBTA）と貿易円滑化」は、ヒトとモノを輸送する自動車などの車両が越境移動するための新たな仕組みとして六ヵ国で検討が進められている越境交通協定（CBTA）について、これまでの経緯とその内容、実現に向けた課題を論じている。

第三章「南部経済回廊－モクバイ＝バベット国境ゲート」は、ベトナムの視点から、同国の中国、ラオス、カンボジアとの国境を概観し、免税店への来訪者などで賑わうベトナム側のモクバイ国境と、国境産業の立地条件を活かしたカンボジア側のバベットのマンハッタンSEZを紹介している。第四章「カンボジア－タイ国境における経済開発の現状と課題」は、南部経済回廊上のチャムジアム＝ハートレック国境とポイペト＝アランヤプラテート国境の双方を対比させながら、カジノと合わせた観光と国境産業の観点から、カンボジアの経済開発を論じている。

第五章「東西経済回廊－ラオバオ＝デンサワン国境ゲート」は、同国境におけるCBTAのシングル・ストップ化の進捗状況とともに、ベトナム側のラオバオ特別経済・商業地域（SECA）とラオス側のデンサワン国境貿易・商業地域（BTZ）を紹介している。第六章「ラオス－タイ越境インフラ整備と経済活動－第一・第二メコン橋を中心に－」は、メコン川にかかるラオスとタイの二つの友好橋建設の経済効果を、ヒトとモノの移動と投資の側面から述べている。第七章「ミャンマーの国境地域開発－ミャワディ＝メーソット国境を中心に」は、ミャンマー－タイ間の国境貿易を概観し、低廉なミャンマー人労働者を活用した縫製業の集積がタイのメーソット側に形成されている現状を述べるとともに、そうした集積がミャンマー側に形成させるには何が必要なのかを論じている。

第八章「南北経済回廊上の国境貿易と経済圏の形成－四ヵ国の結節点を中心に」は、タイ、ラオス、ミャンマー、中国の四ヵ国が国境を形成する地域を、南北経済回廊のラオス・ルート、ミャンマー・ルート、メコン川の水運を用いた三つのルートに沿って国境地域と河川港を紹介している。第九章「中越国境経済圏でみる中越経済格差の縮図」は、中越間の各国境のヒトとモノの移動の増加傾向を示すとともに、中国人向けのゴルフ場やホテルなどで活況を呈する東興＝モンカイ国境、華南－ハノイ間の物流の大動脈である凭祥＝ランソン国境、ハノイと昆明を結ぶ南北経済回廊上の河口＝ラオカイ国境を事例に、ベトナム国境地域で進む中国経済の侵潤を描き出している。第一〇章「中国とミャンマーを結ぶ大動脈－瑞麗＝ムセ国境経済圏」は、中国－ミャンマー間の貿易関係を国境ごとにみるとともに、ミャンマーのトラックが入り、中国側のトラックと積替作業が行われる瑞麗の姐告国境貿易区で増加する投資などを紹介している。

最終章「国境経済圏の可能性と今後の展望」は、国境経済圏開発の背景に潜む各国政府の思惑について述べる一方、国境経済圏開発に求められる政策を国境ごとに論じている。このほか、プレアビヒア寺院を巡るタイとカンボジアの衝突やヤンゴン－バンコク間の陸路輸送実験などのトピックをコラムで紹介している。

（いしだ　まさみ／ジェトロ・バンコクセンター）